特 集

いずみナーサリー施設長・冨永典子先生に聞く
学内保育のはなし

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 武内 佳代
お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 三村 恭子
お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 奥村 則子

本ワーキンググループ（以下、WG）は、まずもっとも身近な保育施設、すなわちお茶の水女子大学の保育所いずみナーサリーについての勉強会を行なうことからスタートした。そこで今回、いずみナーサリーが発行した過去の報告書からだけでは分からない部分、とりわけ若手研究者の利用に関わることについて、いずみナーサリー施設長の冨永典子先生に直接の対談を申し入れたところ、ご快諾をいただくことができた。そして、2007 年 10 月 12 日、WG メンバー4 名（小畑文、奥村則子、臺丸谷美幸、武内佳代）は、冨永先生の研究室を訪問し、先生から2時間にわたって、いずみナーサリーの特徴や課題、さらには、実際学内保育を利用しながら研究に励まれた先生ご自身の体験に基づく WG への助言など、大変貴重なお話をいただいた次第である。紙幅の都合上、そのすべてを掲載できないのが残念だが、以下は、その対談のエッセンスを詰め込んだものである。なお、本 WG では、今後も冨永先生をはじめ、いずみナーサリーの関係者の方々とネットワークを築いていきたいと考える。その第一歩としては、WG によるいずみナーサリー訪問と、何らかのかたちでの訪問報告とを考えている。

――――本日はお忙しいところ、お時間をいただき、ありがとうございます。私たち、若手研究者と育児ワーキンググループでは、本学が女性研究者支援の一貫して実施している「育児」に関するさまざまな試みを、特に学生・若手研究者という立場からとらえかえしてみたいと考えました。そこで最初に話題に上がったのが、本学の附属保育所、いずみナーサリーでした。なかでも、保育料が高いためアクセスするのに躊躇する、という率直な声が聞かれまして、それは若手にとっては一つのバリアだろうという議論になりました。

冨永先生：ですが、本当は決して高くないのですよ。特に、学生が利用する場合は、育児支援奨学金という学内の奨学金制度に申請すれば、月ぎめ保育料も時間預かり保育料も半額になるんですから。だから例えば、0 歳児を週 5 日コースで預ける場合、職員なら 8 万円ですが、学生だと 7 万円で、そこに奨学金制度を使えば半額の 3 万 5 千円になるんです。しかも、いずみナーサリーの場合、時間預かりとか 1 日コース、2 日コースなどがあるので必要にあわせた保育が選べますし。そう考えれば、決して高くないと思うし、将来のための投資だと思ってほしいですね。ただ給食がないのがかわいそうですけれど。

> *本当は決して高くないのですよ。*
>
> *将来のための投資だと思ってほしいですね。*

私が名古屋大学で、子どもを保育所に預けながら大学院に通っていたときには、子ども 2 人分で 8 万 6 千円支払っていました。しかも、バザーもして 28 家族で 550 万も稼いでいたんです。でも私は理系だったこともあり、保育園に子どもを預けている間の時間を買っているようなものだと考えていました。そういう意味では、それこそ服も何も何年も買

わないという生活を、今の若いひとたちが我慢できるかということでもありますよね。それから、私は理系のことしかわからないのですが、文系だとアルバイトなどの給与がとても低いと聞きますので、その点は不利なのだろうとも思います。ほかには、大学のそばに住めないから保育園が遠い、遠いから連れてくるのが大変、という問題はありますよね。ですが要は、それを若い勉強のできるときにやるかやらないかの問題だと思うのです。

いずみナーサリーの保育料をこれ以上安くできないのは、お茶の水女子大学という一大学法人が経営しているからなんです。今の保育単価をご存知ですか。0歳児1人につき、1ヶ月に19万円もかかるのです。それを何とか安くしようと、例えば東京都内の認可保育園では、民営化を図ったり、民間企業に外部委託したりしています。これらの保育園では、半分東京都、半分国から補助金を得ていますが、本学のいずみナーサリーは無認可なのでそうした予算は入ってきません。ですので、いずみナーサリーに勤める3人の保育士分の給与と保育園の事業費、およそ年間1500万円を大学が負担しているのです。そして、それ以外の経費は保育料収入で賄えるように、ということで今の保育料が設定されています。そういうわけでこれ以上保育料を安くすることができないのです

東京都内の認可保育園の場合、国と都が運営費を一部負担しているから安いですし、しかも母親が学生で父親のみ働いている家庭の場合、収入は夫の給与のみなので、査定される負担保育料も安いですよね。だけどそのような家庭では、往々にして保育に「欠ける」、つまり保育に困っていると理解されないことがあるのです。つまり、自治体によっては――文京区では母親が学生でも子どもを預けられますが――母親が大学に通っているのを「趣味」とみなして、保育が必要だと理解してくれなかったりするのです。その逆で、父親が大学院生で母親が働いている場合は入れるんですけれどね。そのように理解が得られない場合、認可外で少々高くても、やはり大学の保育所に子どもを預けられるということはとても大事なことなんです。

やはり、子どものためにはどういう保育がいいのかと考えなければならない。

また、国からの助成はなくて東京都だけが出資する、認証保育園という保育の形態もあります。認証保育園だといずみナーサリーと同じくらいの保育料、およそ8万円で給食も出るし、13時間以上という長時間子どもを預けることもできます。でも、毎日預けることが前提になります。いずみナーサリーのように、1日コースや2日コースというオプションはありません。それ以上に、認証保育園の場合、保育の質にばらつきがあるんです。というのも、普通の保育園は庭が必要なうえ、子ども1人につき何平方メートル必要という厳しい制限がありますが、認証保育園は、駅から5分以内で、近くに公園があればお庭はなくてもよいことになっています。その上、保育園の改築費は東京都が出してくれるので、ほかの形態の保育園よりも経営しやすいんです。だから、駅近くの空きビルを改修して、毎月1人につき8万円程度の保育料が得られるような施設を何ヶ所も作って、曜日ごとに保育士さんをあちこちに向かわせるような事業が成立するんですよ。でも、施設によっては、ただただ事務的に子どもを預かっているだけだったり、中には、「こんなところに預けたくない」と思ってしまうようなところもあったりします。本当に「保育」をしているのかと疑いたくなることもあるんです。

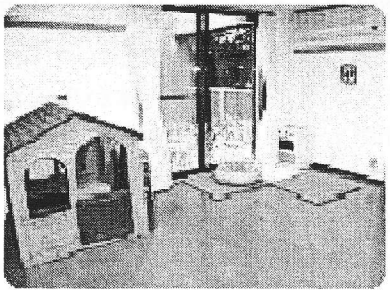
そうするとやはり、子どものためにはどういう保育がいいのかと考えなければならない。それで、いずみナーサリーについても、認証にするか認可にするか、認可外のままいくか

について再三検討して、その結果、認可外でいくことにしました。こういう方針で運営しているので、ときには保育をお断りすることもあるんです。例えば、実験系の研究者の場合 17 時にお迎えなんて無理なので、いずみナーサリーの後、ほかの認証保育園へ、というダブル保育をしなければなりません。その送り迎えをベビーシッターに頼めるならいいですが、お母さん本人がしなければならない場合、子どもはとても不安定になります。「お母さんが来てくれた！帰れる！」とうれしくなった後に、また別の保育園、ということになりますからね。だから、そういうかたには、「最初から認証保育園のほうに預けるほうが、お子さんのためですよ」と断るんです。子どもの気持ちを大切にしたいんですよ。ところで、いずみナーサリーをご覧になったことはありますか？

――――いいえ、いずみナーサリーに入ったことはありません。

冨永先生：機会があれば、ぜひ見に行ってください。とても素敵ですよ。あの建物はもともと、隣接している大塚宿舎が公務員の独身寮だったときに、寮の管理人用の宿舎と寮の入居者の集会室だった場所です。それを、大学が独立法人化するときに国からいただきまして、本田和子前学長が保育園用に使うことを許可してくださった建物なんです。保育園事業に携わっていた私たちには、涙が出るほど嬉しいことでした。当時お借りしていた附属幼稚園内の部屋の３倍もあるような広さでしたから。ただ、もとからあった宿舎を保育園に改装するだけで２千万円もかかったので、給食室を設置することができなくて、そのため給食なしでスタートしなければなりませんでした。保育園の給食室っていろいろな規定があって非常にお金がかかるんですよ。でも保育用の部屋は、床暖房付きのとてもきれいな空間になっていて、とても素敵です。

そもそもいずみナーサリーの経緯を申しますと、設置計画を立て始めてから２年半ほど経った頃に、本田先生に「いずみ保育所」と命名していただいてスタートしました。そのときは、附属幼稚園の PTA 室を改装してもらって、そこで保育していたんです。それから２年半後に現在の場所に移りました。そして、名前も高級感あふれる（笑）「いずみナーサリー」と変えました。でも、先ほどからお話していますように、保育園の維持や運営に経費がかかります。それで、認可を得るか、認証を得るかといったことを検討し、結局無認可の道を選んだことは先にお話したとおりです。ただ、無認可保育所でも、お茶大の施設として認めて「附属保育所」にしてくださいと、大学側に交渉しました。当時私は、本田先生に「保育所を持つということは赤字を抱えるということです。それだけの覚悟がおありですか」とまで言いました。というのも、本学は規模が小さいですから、学生も職員も少ない、それで保育所を経営するなんてもとから無理な話だからです。相当の覚悟がないと。でも、本田先生は、独立法人化後も当面女子大でいくつもりだし、そうであるからには保育園は持っているべきだという方針をお持ちでした。それで、いずみ保育所という、国内で初めて組合主導ではなく大学主導で作られた学内保育園ができたのです。大学の附属にしたのも国内で初めてです。


いずみナーサリー、ほしぐみの部屋の様子

――――そうなんですね。ところで、附属幼稚園の元 PTA 室から現在の場所に引っ越したときに、改築費用が２千万円かかったということですが、その資金はどこか

ら得たのですか？

冨永先生：大学です。それから、最初にいずみ保育所を幼稚園の中に開設したときも改修費は大学が出しています。

――――なるほど。幼稚園内に設置された「いずみ保育所」は無認可保育所としてスタートし、その後、引っ越して「いずみナーサリー」と改名したときに「附属学校部」に入ったのですね。そして、ともに大学が設置経費を出していたのですね。ところで、いずみ保育所運営委員会がまとめた2005年版報告書『大学の中で赤ちゃんが育つ』を拝読していて気づいたのですが、「保育」は厚生労働省の管轄で、「教育・研究」は文部科学省の管轄ですよね。したがって、「教育・研究組織である大学の内部に設置された保育所」という、それぞれの管轄の狭間にあるいずみナーサリーを運営するにあたって、当初冨永先生は、なんとか外部資金を獲得しようと苦心なさっていたようにお見受けしました。たとえば、教育・研究機関である「附属学校部」に入らない限り、いずみナーサリーの活動はまったくの「保育」であって、ならば外部資金は厚労省に申請しなければなりませんよね。ですが、厚労省からは、教育・研究現場である大学内での活動だからという理由で資金提供を拒否され、かたや、文科省からは、それは保育だからという理由で拒否される、そういう状況がずっとあったのでしょうか？

冨永先生：厚生労働省に申請しても文部科学省に申請しても資金は得られませんでしたが、保育所の管轄は厚労省です。それから、幼保連携研究をするという概算要求を、いずみ保育所が幼稚園内に設置されていた頃からある意味戦略的に出していました。どういうことかと言いますと、今では教育に力を入れている保育園も出てきており、乳幼児教育のあり様が変わってきているので、その変化に対応すべく研究上の幼保連携が重要である、それが本学では、附属幼稚園といずみ保育所で可能である、ということで、文科省へ概算要求に行ったのです。今日では保育園に行く子も増えてきているのに、保育園における教育に関する研究が立ち遅れている、という説明をして、そして、これからの幼稚園の先生が保育園のことを知らないままでは困るので、本学の幼稚園教員養成課程の学生に保育園教育を学習させるようなカリキュラムの改革をする、という趣旨です。それは認められて、およそ要求どおりの資金をいただいています。その概算要求でも非常勤保育士を雇用していただいています。そのほかに、タカラトミーというおもちゃ会社とアドバイス契約を結んで、多少資金を得たりもしています。あとは、何とかして常勤の保育士をもう1人増やせるように、ずっと大学と交渉しているところです。

――――常勤の保育士を増やしたいというのは、預かる乳幼児の数を増やすためですか。それとも保育時間を延ばすためですか。

冨永先生：いえ、そういうことではなく、人手が不足している現状を効率的に改善するためにです。今一番困っているのは、子どもの数が増えてきたため、現在の担任制でうまく回らなくなっていることです。もともと0・1・2歳児クラスに担任を1人ずつ当てても、補助に入る保育士がもう1人要るんです。そのうえ、週1日・2日・3日・4日・5日コースの子どもがそれぞれいて、さらに一時預かりの子もいるので、それぞれ保育料が違います。そういった計算から何から、すべて保育園のスタッフが行なっているので、それだけでも事務仕事が多くて大変なんです。

それに、今の開園時間は8:30から17:30までですが、18:00までは開けておけるようにしたいと考えています。でも、保育所では、たった1人でも子どもがいるときには必ず保育士が2人ついていないといけません。そこで、そのようなシフト表を作るとき、保育士が6時間勤務だと非常に効率が悪いんです。給与にしても、8時間の常勤を1人増やす

のと、6 時間の非常勤を増やすのとで比較すると、非常勤を雇うほうが年間 60 万円も余計にかかります。だから 8 時間の常勤を雇ってくださいと交渉していますが、大学側には、経費がかかってでも常勤を減らしたいという意向があるので、なかなか難しいところです[1]。

――――現在いずみナーサリーの利用は、お茶大関係者の子どもに限定されていますが、冨永先生ご自身としては、外部からの応募についてどのようにお考えでしょうか。

冨永先生：私は入れるべきだと思います。というのは、特殊な人間だけで成り立っている集団は保育集団としてあまり望ましくないと考えるからです。それに、ある程度の集団がないと保育効果があまり成り立たないということもありますし。

同様に、望ましい保育という観点から言えば、いかに学生が貧しかろうと、子どもを週 3 日以上は登園させないと保育園の意味がないと私は思っています。それ以下では、子どもの負担が大きくてかわいそうです。それから、19 時まで保育時間を延ばして欲しい等という要望が出るんですが、私としては、18 時までくらいが妥当だと思っています。それは、予算的に難しいという以上に、子どもにとってよい保育とは何か、とお母さんたちに考えてほしいからです。つまり、18 時過ぎて 19 時･･･22 時とかまで保育園に預けておくことが、子どもにとってよいことなのか、ということです。0～3 歳という時期って、ものすごくかわいくて、どんどん人間らしくなっていく時期なんです。その間はお母さんたちには、少し仕事や研究をペースダウンしてほしい。たしかに私も、子どもが幼かったときは、いつまでもその苦しみが続くように感じたし、限界だと思いました。でも、後から思うとその苦しい時間は短かった。その間、両親が子どもをちゃんと見ないで、「忙しい、忙しい」と過ごすことはよくないだろうしもったいないです。ですから、いずみナーサリーの方針としては、預かり時間を延ばしていくのではなく、あくまでも子どものために「よい保育」をする、ということにしたわけです。

――――乳幼児を育てている本学の若い職員や学生の声を聞いていますと、いずみナーサリーが掲げる理念や抱えている問題があまり理解されていないように感じます。ここまで冨永先生から伺ってきたお話との温度差を感じるのです。保育料が高い、保育時間が短い、という声も理解できますが、その一方で、「子ども中心」といういずみナーサリーの理念や、資金繰りの問題などがわかってくると、とても納得できます。

冨永先生：利用する側の声を聞くことは大事ですが、要望通りにいかないこともあるし、ときには子どものために反論しなければならないこともあります。例えば、要望通りに 8:30 開園にしても、1 時間目の授業がある院生 1 人をのぞいて、10 時前まで子どもが来ない、とか――通勤通学ラッシュのため来られないのね。それから、遅くまで登園しないということもあるのですが、遅く来たら、子どもは一番楽しいお散歩に行けないんですよ。だから子どものためを思ったら、親は必死で子どもを時間通りに登園させるべきだと思いますし。それから現在出てきている、3 歳以上の保育を要望する声に対しても、私はそれをしないほうがよい理由を明確に伝えています。つまり、0 歳には 0 歳の、1 歳には 1 歳の、2 歳には

> *子どもにとってよい保育とは何か、とお母さんたちに考えてほしい…0～3歳という時期って、ものすごくかわいくて、どんどん人間らしくなっていく時期なんです。*

[1] 後日、冨永先生から「ようやく交渉が実って 20 年度から主任保育士（副施設長的な仕事をし、かつ保育もするベテラン保育士）の雇用が認められた」という喜ばしいお知らせをいただいた。

2 歳の適切な保育というものがあるように、3 歳からの保育で重要なのはもっと大きな集団で実施することなんです。いずみナーサリーでやっているような、子ども 1 人につき大人 1 人という保育を 3 歳以上の子どもたちにもしていていいのか。3 歳からの幼児期に、子どもを集団保育に慣れさせておかないと、小学校になって大変です。突然 30 何人のクラスに入って生活するなんて。だから子どものためにも、いずみナーサリーで 3 歳以上を保育することはできないと言っています。でも、もしやるとしたら、学童保育も一緒にすべきだと考えています。

――――なるほど、そういう主張も大事なんですね。ところで、いずみナーサリーのスタッフのかたや利用者のかたなどの声を聞くような試みは今まで何かありましたか。

冨永先生：スタッフに関しては、職員会みたいなことはしています。この間はある用件に対処するため、個人面談のように 1 人ずつから話を聞く機会を設けました。ナーサリー利用者に関しては、特に今のところは聞いていませんね。ただ、保護者会は大体年に 2，3 回開いています。ただ、曜日によって登所するお子さんが異なりますので、2 日に分けて行っています。また、先日は幼保の特任講師の先生（保育主任）に保護者のかたがたのご意見・ご要望を聞いていただく機会を設けました。あとは、この間、本学の女性研究者支援室から教職員にアンケートが配られたはずです。

――――そうなんですね。あと、私たちは、本学の女性支援室や学生支援室に、いずみナーサリーの話を伺いに行ったのですが、管轄外とのことでした。私たちのような学生が、育児、あるいはいずみナーサリーの利用について相談したい場合、どこへ行けばよいでしょうか。

冨永先生：いずみナーサリーです。

――――つまり保育士さんに直接相談するということですね。いずみナーサリーのスタッフのみなさんは、事務をやりつつ保育士の仕事もしていらっしゃるということでしょうか。

冨永先生：そうです。現状では保育士が用件を聞き、それから保育士、保育主任、施設長に振ることになっています[2]。本当は保育相談所を運営したくて、そのために保育園内に相談室を設けているんです。だけど今は、とても手が割けない状況です。

――――私たちにとって、さしあたり重要度が高いのは、週末に開催されることが多い学会などのイベントにおける託児ですとか、学内で子ども連れで研究会を実施する場所の確保といったことになるのですが、そのような目的でいずみナーサリーを利用することは可能なのでしょうか。なにか問題がありますでしょうか。

冨永先生：みなさん、いずみナーサリーを利用したがるんですけれど、ナーサリーとして一時預かりを実施するとすれば、週末も保育士に出勤してもらう必要があります。でも、そうすると代休を与えなければなりません。代休を与えたら、今度は代替の人を雇って保育士の人数をそろえないといけませんよね。そのお金をどこが出してくれるのか、ということです。普通の保育園は土曜保育もしていますけれど、いずみナーサリーでは保育士の人数に余裕がありませんから、そういう対処が必要になるでしょう。要は、土日分の休日手当てが出せるか否かということです。

　でも、場所をお貸しすることはできます。ですから、ナーサリーの敷地内で、外部の派

[2] 注記 1 で述べたとおり、2008 年度 4 月からは、主任保育士が雇用されることになるため、この業務は主任保育士の担当となる。

遣の保育士を一時的に雇って託児を実施するほうが現実的ですし、よっぽど安いです。今年の F-GENS のシンポジウムもそのような形で利用する、と申し込みをいただきましたが、結局そのようにすれば安く託児を実現できるんです。大学が規定しているナーサリーの場所代と、派遣業者への託児料金と、おやつ等の雑費、そして託児する子どもへの保険料だけで済みますから。あとは、施設内で第三者である業者と子どものみになったときに、破損等の問題が発生すると責任の所在があやふやになってしまうので、一応いずみナーサリーで業者による託児が実施されるときには、本学に籍のあるかたに責任者として同席してもらうように頼んでいます。

一般的に、外部委託すると、託児は安くなります。だから今、いろいろな大学で保育園を外部に経営委託していますね。でも、そういう保育を本学がやる意味があるのか、というところで、いずみナーサリーの挑戦があるんです。本学が幼児教育のメッカならば、これぞ理想っていう保育をするのが一番だと思うんです。

――――先生のお話を伺って、いずみナーサリーの目指すものが、親も子も納得できるような保育である、という、何か保育の本質のようなものを感じました。また、私たちのいるジェンダー研究の分野では、女性研究者が比較的多いので、具体的な託児の実施方法についてのお話もとても参考になりました。ところで、今日の対談で、私たちはいずみナーサリーの運営の経緯や現在直面している課題などを知ることができましたが、そういった情報にアクセスできる学生や研究者が少ないように思います。この状況を改善するためには、利用者や関心をもつ人のネットワークがあるといいですよね。そうすれば、情報の伝達の効率化にもつながりますし。情報の発信やコミュニケーションの促進が重要ですね。

冨永先生：そうですね。あと、私は大学院の授業の最初に、自分がどのような変遷をたどってきたかを話すんですよ。原ひろ子先生がよくおっしゃるように、女性は特にロールモデルを必要としている。だから勉強会をするんでしたら、まず学内のいろんな先生に話を聞くといいと思います。私は今 60 歳過ぎですが、私のひとまわり上の世代の先生がたは、結婚しても子どもを産まないか、子どもを産んだら親に育ててもらう、という人たちでした。その前の世代になると結婚もしない、あるいは子どもを持たない、という選択をしなければなりませんでした。子どもを産み育て、保育園に預けられるようになったのは、ようやく私たちの世代からなんです。そういった時代の流れもありますし、ぜひいろんな年代の先生の話を聞くべきだと思います。

例えば、私自身は、2 年間勤めて結婚して勉強しなおして修士に入りました。そして、ドクターが終わった年に出産しました。そんな私の身の周りにも、育児しながらがんばっているいろいろな人がいます。きっとみなさんの周りにもびっくりするような経験をしていたり、知恵を持っている先輩はたくさんいると思いますから、ぜひいろいろ見たり聞いたりしてください。

> *女性は特にロールモデルを必要としている。*
>
> *だから、まず学内のいろんな先生に話を聞くといいと思います。*

それから、今の若い世代では、お父さんも子育てを楽しむようになっているからまた面白いですね。食事を作ってくれるお父さんなんかもいるし。そういう人たちともつながって、ネットワークができるといいですね。私も個人のレベルでは、自分の学生にいろいろアドバイスしていますよ。「子育て中はなにかと悲観的になることも多いだろうし、キャリアについても不安に思うかもしれないけど、それは後から思えば本当に短い時間だから、思い切り子育てを楽しみなさい」って。やはり子どもを育てながら、親の側も育っていくんですよ。私も自分の子どもにそういわれま

す、「お母さんが僕たちを育てたんじゃなくて、僕たちがお母さんを育てたんです」と（笑）。

ところで、全学共用研究棟（旧人間文化研究科棟）の１階にベビールームがあるのはご存知ですね。あそこもなかなか活用できるんですよ。いずみナーサリーに子どもを預けていない人でも、誰でもおむつの交換や授乳、搾乳に使うことができます。また、いずみナーサリーが 17:30 までなので、その後もう少し保育が必要な場合、「保育お姉さん」という本学の学生ボランティアにベビーシッターを頼むことができるのですが、このベビールームが結構役に立ちます。夏なら学内をお散歩して過ごせますが、冬は寒いのでベビールームでボランティアの学生と一緒に本を読んだりして過ごすことができるからです。そういうシステムもあります。

――――初めてうかがいました！しかし、先生がおっしゃるように「非常に短い間」とはいっても、女性研究者にとって育児と研究業績とを天秤にかけるという問題は、とても深刻かつ切実な問題かと。

冨永先生：子育ての時期と昇進のために成果を出さなければいけない時期は、重なりやすいですよね。確かにそこでちょっと差が出ますが、でも、これも原ひろ子先生がよくおっしゃっていますが、生涯に出す論文の数は男の人と女の人で差がないとのことです。

――――そうなんですか！前向きな気持ちになりますね。そんなお話を伺うと、やはり育児をご経験された研究者のかたをお招きして、若手研究者や学生で少しずつ勉強会や座談会を重ねていく必要性を改めて感じます。

冨永先生：それは、ぜひともするといいですね。それから、追加情報としてお教えしますと、私が入っている「日本女性技術者フォーラム」という女性技術者・科学者の会は、理系中心ではありますが、文系のかたも入れるようになっていて、子育ての座談会など参考になる活動をしていますよ。そこの定例会は、学生は無料で参加できるので、ご参考になさったらよいでしょう。私個人は、自分が大学にずっと所属しているためによくわからなかった、企業研究者に関する調査報告などに関心があって入会したんです。自分の教え子が社会に出ていくことを考えて、いろいろ知りたいとおもって。その会はとても面白いですよ。すごい人もいます。自分が働き続けるために、夫を非常勤にさせたとか（笑）。

――――どうもありがとうございます。では最後に、これからの課題などをお聞かせいただけませんでしょうか。

冨永先生：お茶大の卒業生では、保育士になった人がまだ少ないです。保育士の資格は持っていても、幼稚園の先生になっている人が多いのです。だから、お茶大らしい保育を、今後どのように展開していくかということが、これからの問題ですね。

――――冨永先生、本日は長い間どうもありがとうございました。大変勉強になりましたし、今後、私たちが活動していくうえで参考となる示唆や力強い励ましをたくさんいただき、とてもうれしく思いました。ご多忙のなか、貴重なお時間を割いていただきまして、本当にどうもありがとうございました。